

佐藤嘉恭氏（元大平首相秘書官）に聞く 弱き者に対する姿勢

— 聞き手・阿部 穆



ベネチア・サミットで日本代表団の席に飾られた大平首相の遺影と佐藤嘉恭秘書官（ベネチア・1980年6月22日）

大平総理とは初対面ではなかった

——大平内閣が成立したのは一九七八年二月八日のことですね。成立と同時に佐藤さんは、総理秘書官を命ぜられたわけですが、それまでに大平さんは二度にわたって外務大臣を体験されているわけです。その時までに佐藤さんは何か大平さんと接点があったわけですか。

佐藤 第一次外務大臣は、私が末席の事務官の頃です。一九六二年夏、インドネシアから戻って、アジア局の南西アジア課にいたんですね。大臣室に伺った記憶は、あまりないんですが、大臣の通訳を何度かしたことがあったと思います。はっきり憶えていることは、全くプライベートなことで恐縮ですが、私が結婚した時（一九六四年六月六日） 余談だけど、当時ジューン・プライドというのは、日本ではまだ珍しい頃で、着物を夏ものに衣替えの後は結婚式は余りやらないものだというのが常識だった時代でした。家内の父（中川融氏）が外務省の条約局長をしていたものですから、大平ご夫妻が披露宴にきて下さっていたんですよ。それで主賓の一人として、お言葉を頂戴したんです。如水会（一橋大）の大先輩というご縁もあったのです。第二次外務大臣の時には、私は法眼（晋作）次官の秘書官で、大平 法眼というコンビのメッセンジャーとして、案件が何だったか記憶してませんが、何回か大臣室へ行きました。藤井宏昭さん（国際交流基金理事）が大臣秘書官をしておられ、「おい何だ」と聞かれたりしましたね。法眼さんが最後に誠を切られるわけですが、その時の様子なども生々しく憶えています。大平内閣ができるまでは、その程度の接点ですから、大平総理ご自身が「あいつを」というご指名は、なかったと思います。

——そうすると、役所（外務省）の順番で秘書官になられたわけですか。

弱者に対する姿勢

佐藤 人事のことは当局の人でないと言相はわかりませんが、あとで私が聞いた話では、当時、秘書官候補には後にロシア大使となられた渡辺幸治さんが拳がっていたそうです。渡辺さんがなるというのが専らの話でした。彼は当時、アジア局の参事官で私はその下での北東アジア課長でした。大平内閣の発足を前にした一二月のある夜、渡辺さんに同情して、「ご愁傷さまですね。一杯飲みに行きましょう」と言つて、飲みに行つたのを覚えています。しかしその後、どういふ事情からか、突然降つてわいたように私のほうに秘書官人事がまわつてきてしまつたので、大変おどろきました。役所の年次から言えば、私の前が福田外相の秘書官もされた三期上の小和田恒さんでしたから、この間に沢山、人がいたと思います。長富（祐一郎）君（総理首席補佐官）が秘書官人事を森田（一）さん（総理首席秘書官）と相談しながら連絡役みたいなことをしてましたよ。それで何の拍子がよく分かりませんけれども、「いや如水会で……」という話になつて、落ちついたというふうに聞かれましたけれども、年次的には私はアジア局の筆頭課長でした。まあ、こんなことで命ぜられるままに秘書官になつたということです。

——それじゃ、秘書官の中では総理と全くの初対面ではなかつたわけですね。

佐藤 ええ、初対面ではありません。私が北東アジア課長の頃、大平総理は幹事長をされてましたから、北朝鮮問題や韓国問題については、よく幹事長室へご報告にうかがいましたよ。だから、お顔は私はよく知っていました。が、総理も首班指名を終えて総理室へこられて、秘書官が一人、一人紹介されたわけですけども、「やあやあ、頼むよ」といふようなことで握手をされたのを、非常に鮮明に憶えています。

実 — 大平内閣の一年半の間は非常に政争も激しかったけれども、他方、外交問題では非常に多くのことがあり、こんなに外交日程が詰まった総理大臣というのは余りないと思うんですね。一番最初から気にされておったのは、やっぱり東京サミットをいかに成功させるかということだったですね。七八年一二月、総理に就任された半年後の七九年六月末に東京サミットがあるわけですから、それに向けて大平さんとの間でいろいろ準備といいますが、相談があつたのですか。

東京サミットを軸に外交日程を組む

佐藤 — 一二月にご就任になって、外交日程を策定する過程のなかで六月の東京サミットを軸に外交日程を組むことになりました。就任早々、七九年一月一日、米中間の外交関係の設定ということがありました。七二年初頭、ニクソン大統領の訪中により、事実上の関係ができるんですけれども、台湾問題をめぐって論争が続ぎ、外交関係の設定までなかなか行けなかつたわけですね。それで、カーター政権になってから動き出して、七九年の一月一日に外交関係設定になつたわけですね。それが実は半月前に事前通報がアメリカからきたわけですね。これは、七一年夏にキッシンジャー・シヨックがあり、ニクソン訪中は頭越しの外交として大変な騒ぎになつていたわけですね。そういう歴史上のレックスもあつたんでしょう。あるいは大平総理とカーター大統領の個人的な信頼関係という面も、あつたように思うんですけどもね。七八年一二月、私が秘書官につく前の何日かに、外務省経由で事前通報がありました。ワシントンと北京での正式の発表は、たしか一二月一五日だつたと思います。米

弱者に対する姿勢

中関係の正式な設定は、大平外交にプラス材料になったと思いますよ。この前提で東京サミットをプランしていくことになります。

——まず日米関係が円滑に動き出したということですね。

佐藤 やっぱり大平総理の外交基軸は、日米関係にあったと思います。日米安保体制、日米友好関係ということ……。それで七九年五月に訪米して、カーター大統領との間で、東京サミットへの協力の約束をとりつけ、東京サミットへ向けて準備をかためていったと思います。まずは国内固めが第一でしたから、年の前半はそれに専念された。今のように一月に外遊されるということはありませんでしたし、それから週末を利用してちよつと行くというような拙速なことも考えませんが、五月の連休の時に訪米されました。米国から一度、帰国されてから、五月九日にUNCTAD（国連貿易開発会議）総会に出席されるため、マニラに行かれたわけですね。ですから東京サミットを主宰するに当たっては、アメリカとアジアの二つの視点で対応したというのが私の記憶です。

——五月二日に大平・カーター会談があつて日米共同声明を出すわけですが、大蔵大臣当時にカーター前ジョージア州知事と会ったということがあるんでしょうけれども、非常にいい雰囲気では成功するわけですよ。その時、大平さんがアメリカを非常にエンカレッジ（激励）するというか、あるいは「同盟」という言葉を使われたとか言われていますが、その辺はどうだったんですか。

佐藤 私の記憶に間違いがなければ、最初の訪米での課題は日米の貿易摩擦問題がかなり大きなウエイトを占めていたように思います。電電公社の市場開放の問題、これは福田内閣からずーっと引きずっていたような問題でしたが、日本の市場の閉鎖性の問題が大きかったと思います。その解決

実にアメリカ側で努力してくれたのが、ボブ・ストラウス通商代表でした。小和田恒前秘書官を事前にワシントンに派遣したりして腐心した経緯もありました。貿易摩擦問題への対応は、やっぱり大きな宿題だったかなという印象を持っています。また、日本のベトナム難民受け入れの問題もありました。受け入れへ向けて約束をしましたが、当時は総理まで上げて決めなくてはならない問題だったのです。

「同盟」の言葉が出てきたのは、次の年（八年）五月の訪米の時でした。イランのアメリカ大使館人質問題がまだ解決していないので、その時にカーター大統領を激励されるわけですね。

——しかし七九年の会談も、非常に良かったですね。

佐藤 会談としては非常に前向きな会談だった、と記憶しています。総理は米国の持っている良さを評価され、例えば、難民を自由に受け入れてくれる米国がなかったら、世界は一体どうなるのだろうかと述懐されていました。

——何かカーター大統領のほうも張り切っていて、ホワイトハウスのテラスで、パーベキューみたいな晩餐会をやったり、いろんなタレント、ステイビー・ワンダーとかを呼んだりしてね。当時の晩餐会としては型破りの、南部スタイルというのをやったんですね。

佐藤 会談の中身もあるんだけど、同時に歓迎の仕方が、大変、変わっていました。ホワイトハウスの晩餐会場でブラック・タイを着てやるというような感じじゃなくて、もっとオープンなアメリカらしい歓迎の仕方でしたから、われわれも多少、驚いたんですよ。ブラック・タイのパーベキューでしたから、いわば国賓の歓迎ディナーとしては、えらい型破りの歓迎の仕方だったのです。

——その時以来、カーター大統領との関係というのは、非常に良くなったわけですね。それは何ですか。個人的な感性が合うとか……。

佐藤 まあ、それだけではないと思いますが、大平総理の外交経験、大平総理の人柄が役割を果たしたということでしょうか。アメリカ人から見ても、「この人となら話ができる」と感じさせたんじゃないですかね。当時、マンズフィールド駐日大使は、大平総理について評価の高い報告をしていました。大平夫妻は、マンズフィールドご夫妻とは個人的に非常に親しく付き合っておられましたから。瀬田の私邸にもこられたりしてね。

——そういうことも含めて、布石を打って七九年六月の東京サミットということになるわけですが、思いもかけないのは、その時に石油の問題が出てきて、日本だけが蚊帳の外、欧米諸国は集まって協議して国別割り当てをやるうじやないかということになって、大平さんは非常に苦悶するわけですね。その時に、カーター大統領が助け舟を出すということがあったと聞いていますが、そこら辺の経緯はどうだったんですか。

石油の国別割り当て問題で苦悶する

佐藤 今でもサミットはよく直前に何が起こるかで会議の雰囲気ガラッと変わるわけですが、石油問題は、イラン問題の流れの中で出てきた問題でした。それだけに深刻さが積りに積っていたんだと思うんです。人質問題があるし、急進的政権が出てきたということですね。エネルギーの問題が一

実 つかの課題になるということは、ある程度、見通しをもって天谷（直弘）通産審議官と、いろいろ相談
就 しておりましたけれども、サミットで石油の消費節約をめぐって具体的な数字を出して、あそこまで
華 ギリギリ出てくるとは、実は皆な想定していなかった。責任ある当局も、そこまでは見通していなか
去 った、と思います。産油国のOPEC諸国の動きを近くで見ている欧州諸国にしてみると、消費国と
しては断固とした結束を具体的な数字で示さないと対抗できない、と判断していたと見られます。大

平総理は議長でしたから、ある程度、聞き役に回らなければいけないということがありましたね。し
かし、日本は日本の立場として、いきなり二〇パーセントも三〇パーセントも輸入量を削除しろ、あ
るいは使用量を減らせというようなことは、当時の日本の経済運営上たいへん大きな問題でした。で
すから総理がかなり時間をかけて、「日本の置かれている状況というのは、あんた方とは本質的に違う」
ということを説かれたと聞いています。数字を挙げられたり、いろんなことをされたと思いますけれ
どもね。

それで、そういう話を聞いて、カーター大統領とシュミット西独首相でしょうね、当時、日本の立
場について、それなりの理解を持っていたのは……。ですから本来ならば一日目の午前の会議が終わ
って昼食ではまた別の話題となるわけですが、この時は昼食のあいだ中、さらに話がつづき、「日本
は早く回答を出せ」という話でした。その昼食が三時か三時半ぐらいで終わることになっていたのが
四時ぐらいまで続くわけですね。それで、これは大変なことになったというので、その晩は鳩首協議、
あるいは翌日も朝早くから会議ということがありました。カーター大統領もシュミット首相も「日本
の特殊な事情というのは分った」と言い、それでアメリカの立場として緊急の時には、いわゆる「戦

弱者に対する姿勢

略備蓄」を使うということも念頭に置いたのか、「そういうものもある」という前提での議論に変わっていくわけですよ。つまり「何かの時には日本を支援する」というような議論です。それからヨーロッパのほうは、ドイツとフランスとでは、中東への依存度などで事情が若干、違っわけですよ。それに当時は、まだEUの代表がEU全体としてまとめるなんてことは、とてもできる状況ではありませんでしたから、そんなことで日本に対する理解も、それなりに深まったと思いますね。それには、やはり大平総理が説得力ある自分の言葉で事情を説明をしたというところがあったんじゃないですかね。

——何か言い出したのはフランスだった、という話ですが……。

佐藤 多分、そうなんでしょう。私も、その辺は記憶が確かじゃありませんけども。フランスは中東に対する伝統的な立場がありましたし、イギリスも当時はまだ北海油田が海のものとも山のものともつかない状況でした。ヨーロッパの中で強腰だったのは、フランスだったでしょうね。

——それで結局、カーター大統領やシュミット西独首相の助け舟というわけじゃないけれども、それで一応、打開するわけですね。

佐藤 「議長国を困らせることではいかんのかな」という空気に変わって行ったんですね。その辺は、やっぱりヨーロッパのマルチ外交の、一つの持つて行き方として、歩留りを計算しながら対応するところが、ちょっと見えたとような気がしました。東京サミットの生々しい中身は、シエルバをされていた宮崎（弘道）外務審議官、サブシエルバの国広道彦経済局参事官が一番よく知っておられると思います。

実 ————それで、何か大平さんは、ホツとされたんでしよう。サミットが「うまくいったから、もういつ辞めてもいい」というようなことを、しきりに言われたそうですが……。

去 華 佐藤 非常に印象に残っているのは、羽田にフランスのジスカルデスタン大統領を見送りに行かれた時のことです。彼が一番最後に離日した首脳だったんです。総理は「いやー、終わったな」とホツとされてね、「これで、もう日本の外交としてやるべきことはすべてやったなあ。俺はすぐ辞めてもいいんだな」と、われわれ秘書官に言われたのです。森田さんが慌てて、「いやいや、まだそんなことを言ってもらっては困ります」と言った、そんな一幕を思い出しますね。

———それから、一二月に中国に行くんですね。この中国訪問というのは、何だったんですか。

対中経済協力は大きな政治決断だった

佐藤 国交正常化後、日本の総理の中国訪問として、これが初めてだったんです。三木（武夫）さんも福田（赳夫）さんも行っていない。大平外交の柱は、日米を基軸にしながら、一つは中国との関係、もう一つはアジアを軸にする環太平洋諸国との関係でした。その中で一番最初に手掛けなければいけないのは、中国だったと思います。前年の七八年秋に「日中平和友好条約」が成立し、鄧小平さんを迎えておりましたから、これに早く応えないといけない、ということもありましたね。そして中国へ行く以上は、中国の発展のために何ができるかという問題が、実はたいへん議論されてきました。端的には円借款プラス無償を出すか出さないかという問題で、外交当局の中でも政府の中でも議

弱者に対する姿勢

論がありました。大体、自給自足、自力更正の世界を目指している国が援助を受けつけるのか、という基本的な議論だった。後に分かってくるんですけど、中国では七八年春頃から路線の転換の動きがあり、一二月に「三中全会」が開かれて鄧小平の改革開放路線が決まるわけですが、なかなかそれが外国に理解されるような形では出てこなかったのです。果たして経済援助の合意ができるのか、と。しかも、当時はすでに中国は核保有国でしたから、そういう国との間で無償資金協力とかができるかどうかということが、たいへん議論になっていました。

——外務省内でも議論があった……。

佐藤 それで私も、何度か総理に呼ばれて「外務省の検討状況はどうなっているんだ」と検討の促進を質されたことを記憶しています。当時、アジア局長が柳谷謙介さん、局次長が三宅和助さん、中国課長が谷野作太郎さんでした。総理のところへは各方面から意見が寄せられていたので、外務省がなかなか方針が上がってこないことにいらいらしておられた。そのことを柳谷アジア局長に伝え、急いでほしいとお願いをしたように思います。一月になっていましたかね、ようやくアジア局長が総理のところへこられるわけですね。その前座として三宅さんが事務交渉をするわけです。そうすると、中国側が「円借款とはどういうものだ」とか「無償資金協力とはどういうものだ」とか言って、かなり日本の考え方に食いついてきたのです。これは、もう彼らは用意しているんだな、というふうに見取れたんですね。それが多分、秋口だったと思いますよ。ですから総理もかなりいらいらしておられたと思います。

私は円借款のほうは素人で、あんまりよく知らないのですが、話を取り次いでいました。私は憶え

実
ていないのですが、「日本と中国との関係を考えたら、これは前向きに考えざるを得ないんじゃないですか」と当時の外務省幹部にだいぶキツイことを言ったらしいんですね。「随分、キツイことを言われたよ」と最近、私に言う人がいるんです。ですから、大平総理のこの訪中は、東京サミットを終去えられて、さてこれからという課題が、まさに中国だということであつた、と思います。

——格別の懸案は、なかつたんですね。

佐藤　そうですね。国交正常化をして、最大の懸案の日中平和友好条約が七八年に片付いていますから。共同宣言で合意した実務協定、航空協定とか海運協定とか租税条約とか、そういうものが整理がついていて、日中両国の基本的な関係の枠組みはつくられていました。さて、これからの日中関係をどのように展開して行くかという政策討議のなかで、この円借款の問題があつたわけです。当時は、他のアジア諸国が中国に膨大な円借款が供与されるのではないかと懸念を抱いていました。相当、ブルッシャーを受けたですね。それから、アメリカが一体これをどう受け止めるか、ということもあつた。この関連で七九年一月一日の米中の外交関係設定は大きな意味があつたわけです。対中経済協力は大きな政治決断だつたと思います。サミット後の外交戦略は環太平洋、その中であつた中国を固める、そして豪州まで次の年に行くと。それでアジア外交をもう少し詰めたかつたんですね。ところが業半ばにして、それが未完成に終わってしまったと思います。アジア諸国で総理が行かれたのは、七九年五月のマニラの UNCTAD 総会出席だけになりました。八年一月、キャンベラからの帰途、パプア・ニューギニアに寄られたのですが、これは環太平洋連帯構想への始まりだつたんですがね。そんな外交戦略を展開する矢先に亡くなられたので、たいへん残念でした。

——その豪州訪問も含めて、環太平洋連帯というものに非常に関心を持たれたというのは、やっぱりあの環太平洋連帯構想研究会の報告とか、あるいは外務大臣であった大來（佐武郎）さんのインプットなどがあつたからでしょうが。

環太平洋連帯構想は総理の持論だつた

佐藤 あつたと思います。ただ、ご自身も、中国大陸のことは戦前、大蔵省から興亜院に出向して内モンゴルの張家口で過ごされているご経験があり、「陸上の距離を克服するより、海の距離を克服するほうが君、易しいんだよ。今の技術力により海の距離の克服は、そんなに難しいことじゃない。環太平洋というのは非常に近いんだ」というお考えをよく聞かされましたね。

——それが今日では A P E C（アジア太平洋経済協力会議）という形になってくるわけですね。まだ A P E C はできていないわけですね。

佐藤 できてないですね。

——その時に、もう早くもそういうことを言っておられた……。

佐藤 そういう構想を持っておられたので、感慨深いものがあります。

——かなりの先見性というか……。

佐藤 そうだと思えます。これは実は、アメリカとの関係では非常に問題になるんです。「大平さんは日米安保に代わるものを考えているんじゃないか」という懸念が伝えられてきました。「日米安

保輕視論になつて行くんじゃないか」ということを、今、国連大使をしていますホルブルック國務省アジア・太平洋担当次官補（局長）が喧々囂々、言つてくるんですよ。「いや、そういうことじゃない。日米安保を基軸にしながら、環太平洋というものを考えているんだから、そこは誤解をしないでくれ」ということを、当時、團田（直）外相の秘書官をしていた佐藤行雄氏（現・国連大使）とか、北米一課長の福田博氏（現・最高裁判事）などが間に入つて、随分、ホルブルック次官補にインプットしてもらつたんです。お二人からは大いに助けをかりました。

——八 年一月のオーストラリア訪問も、そういうふうな位置づけからというと、非常に意味があつたわけですね。

佐藤 そうなんです。日本の総理が行つたのは、田中（角栄）総理以来ですから、しばらく行つてない状況だつたし、豪州の対日感情も随分変化してました。それに、文字通り「環太平洋」構想について、大平総理は英語でスピーチをされました。

——その間に、七九年の秋に総選挙があつて、いわゆる四十日抗争が起こるわけですね。それで、すつたもんだしているうちに、今度は第二次大平内閣ができて、外務大臣が團田さんから大來さんに交替するわけですね。それで、八年のいわゆる「最後の旅」といいますかね、そこへ行くわけですが……。これは当初の計画ではアメリカとメキシコとカナダの三国を訪問するということでしたが、主はアメリカで、メキシコはきてくれたら石油の増量を認めるといふような話で、「じゃメキシコにも行くか」ということで行つたと思つんですが、まずアメリカについて伺いましょう。

八〇年の訪米で「日米同盟」を表明

佐藤 いや八 年の訪米の主たる目的はアメリカではなくて、環太平洋の思想の下でメキシコとカナダを訪問することだったのです。しかし、イラン問題でカーター大統領が困り切っているところにアメリカの空の上を飛んで、メキシコとカナダに行くというのは良くないというので、ワシントンに一晚泊まりで、カーター大統領を「精神的にサポートする」ということでした。たしか会談が終わったあとに、ローズガーデンで総理が英語でリマークス（挨拶）をやられたのが、アメリカ人に非常に受けて、「日本も立場はしっかりしているのだな」というふうを受け止められたと思います。その趣旨は、まさに「日米は同盟関係にある」ということを、短い言葉ながら強く印象づけたものでした。

——その時に同行した加藤（紘一）官房副長官が書いたものを見ると、相当、総理は強い口調で、日米同盟の強固なきずなどアメリカを日本があくまでバックアップするということをカーター大統領に言ったという話ですが、そうなんですか。

佐藤 そのとおりだと思いますね。その後、日本の総理が行かれて、日米関係は同盟関係でキチンとしているのだとたびたび確認し、「同盟」という言葉をめぐって国会でも随分、議論されるようになります。あの時の大平訪米の成果が、そのまま国会に持ち込まれていたならば、もっと同盟の議論が成熟したかもしれません。しかし、それは結局、チトー大統領のお葬式に参列し、内閣不信任案が可決され、総選挙になり、そして総理の死去となってしまわれたので、ほとんど話題にならずに終わってしまいました。

実

——あれは、アライアンス（同盟）という表現ですか。

就 佐藤 そういう表現だったと思いますね。当時、われわれ秘書官連中と福田北米一課長との間で、いろいろ起案をしたわけですが、「英語でまず書いてみよう。その上で日本語の翻訳を考えていく」という発想で仕事をしていました。大平総理も「まあ、それでいいだろう」ということでした。

——私には、八年の一月から五月ぐらいまでの間に、大平さんがかなり急激にグーツと日米同盟のほうへ行った、一つの思い出があるのです。その年の初め頃に、ヨーロッパのどこかで日米欧三極委員会がありまして、それに宮澤（喜一）さんが行ったわけですよ。行く前に宮澤さんが瀬田へ見えてね、珍しく大平さんと長い時間、話をされたのです。その後に私がたまたま伺ったら「いま宮澤君がきて、三極委員会に行くというから、『アメリカとはいろんな面で価値観を共有するのだ』ということ、君、よく。言ってくれ」と。それで、とにかく、アメリカを支援しなけりゃいかんだ」というようなことを言われておったことを記憶しているんですけれどもね。

佐藤 日米関係は他に代えようがないという強い信念でした。その上に七九年一月二七日、ソ連軍のアフガニスタン進駐というのがあって、わが国の対ソ連政策が、またある種、強硬路線に転換して行きたいへんな事件でしたからね。そういうソ連の動きを大平総理は敏感に受け止めておられたんじゃないでしょうか。それからが始まりだと、私は分析しているんですけれども……。

——それで、モスクワ五輪のポイコットが起こるんですね。

佐藤 そうそう。それは当時、伊東正義官房長官が非常に明快に裁かれたと思います。総理も非常に明快でしたね。そこにも同盟の議論が出てくるわけですね。スポーツの世界ではあるけれど、残念

ながら政治問題化してしまった、ということだったと思います。おっしゃるように、一九八一年には、日米の安保体制の強化を意識されたと思いますね。残念ながら亡くなられて、完成しなかったのが……。

——それで、アメリカは分かりました。今度はメキシコですよ、これが大変だった……。

後味が悪かったメキシコ訪問

佐藤　メキシコには松永信雄大使がおられました。松永さんがある時、大平総理宛に「メキシコにきて下さい」という長文の、いわゆるわれわれの言葉でいう「私信」を書いてこられた。それを私はいちいち読ませてはもらえなかったんですけども、内容は二つあったと思うんです。一つは「メキシコは大事だからきて下さい」という陳情、それからもう一つは「こられれば石油の問題も見通しが立つでしょう。自分はそのために一生懸命やりますから」という趣旨のお手紙だったと思うんですよ。それで、われわれもたしかに当時、エネルギーの問題で七九年の東京サミットできびしい経験をしていましたし、メキシコの石油が二〇万バレルから三〇万バレル入ってくるという話ですから、経済的にもメリットが大きいと思いました。その直前か半年ぐらい前に佐々木義武通産大臣がメキシコに行かれたんですが、まともでないですよ。それで、いよいよ大平総理のメキシコ訪問の課題の一つになるのかなと思いつつ、非常に気がかりながら行きましたね。本当に見通しが立つのかということですね。前の晩まで天谷直弘さん、その他が一生懸命、交渉してくれるんですけども、なかなかまともじゃなかったんです。

実 — ものすごく難航したわけですね。

就 佐藤 結局、あれは二〇万バレルで落ち着いたんじゃないかと思うんですけど、事務的には。ところが話は前後するけど、日本の石油業界は乗ってこなかったのですね。二〇万バレルという見通しがありながら、なかなか合意に達しないんですよ。多分、それは油の質だとか価格の面で折り合わなかつたんじゃないかと思いますが……。いずれにしても、メキシコ・シティーの一八メートルぐらいもある高地で、夜中の一二時くらいになつても延々と総理の前で会議をやるんだから……。異常でもあり、側近としては総理の体調が心配なので、森田さんとご相談して結論がどうなるにせよ、お休みいただくことにした、と記憶しています。大平夫人も、またご心配でしたね。交渉の詳細にわたつては、私はよく憶えていませんけれども、出て行く時は通産省は三〇万バレルぐらいの見通しを言つておられたように思いますね。大鷹正さんが外務省中南米局長で、必死になつてまとめようとされていました。

— だけどロベス・ポルティーヨ（メキシコ）大統領が強気で、まったくいい返事をしなかつたんでしよう？

佐藤 おそらく、それはその通りだったでしょう。

— 総理は「それならば結構だ。別に頭を下げて……」。

佐藤 いや、「結構だ」とはおっしゃらなかった。ポルティーヨ大統領のほうで「何かおっしゃりたいことがありますか」と言つてきたんですよ。

— 誘い水ですね。

佐藤　それで、総理が「向うから言ってくるのならともかく、こちらから言う話じゃない」と……。

——油乞いみたいなことで……。

佐藤　「いや、特にありません」と言われたんですね。ですから、そこでは物別れになったというのが真相ですね。ただ、この会談の後、メキシコ側はいろいろ考えて、駄目になったということではなくて、継続審議なんだということと二〇万バレルというのが、後で出てきたんだと思います。後日、メキシコの専門家、ラテンの専門家の人で通訳をしていた人が、「あそこで総理が物乞いをしながら、大統領の気持ちにくすぐるような発言をしていたら、多分、何か数字が出てきた、と自分は思ってた通訳をしていたんですけど」と言っています。

——その人のことは、菊地（清明）さん（元大平外相秘書官）のインタビューで出てきましたよ。伊藤昌輝さんが通訳をしたと……。

佐藤　そうでしたか。なかなかスペイン語ができる、立派な人ですよ。

——しかし、菊地さんの総理に対する評価は、そこはちょっと違っていますね、「そこで大平総理が頼む、と言わないところがいい」と言つのです。つまり普通の政治家なら、そこで何とか実を挙げようとして、何か言うんだけども、「駄目なら駄目で結構」と割りきってやるところが、大平さんの偉いところじゃないか、という話なのですな。

佐藤　総理は、かなりイライラされておりましたよ。「事務当局は、そんなもの、まとめられないのか」というような感じを持っておられたと思います。だけど最後の段階は、おっしゃる通りです。ですから会談が終った後の空気は、決して悪いものじゃなかった。

実 — その時点においては、メキシコ訪問はかならずしも成功ではなかったわけですね。

就 佐藤 正直、申し上げて、まあ、ちょっと後味が悪かった。

華 — あまりいい気持ちじゃなくて、カナダへ行くわけですね。行く途中でユーゴスラビアのチトー大統領の死去という連絡が入って、さあユーゴへ行くか行かないかという話になるわけですね。

カナダの大使公邸でユーゴ行きを決断

佐藤 飛行機がニューヨークの上空を飛んでいた時に、無線でチトー大統領が亡くなったという連絡が入りました。それで、すぐ総理に報告をして、「行っていたかどうかというふうに官房長官とも、ご出発前に打ち合わせしてあります」と申し上げましたら、「俺は行かん」と言われたのです。森田さんももちろん、事前の打ち合わせには関与していただきましたので、当然、行っていただけのものと思っていたわけですね。ところが、総理の反応がそんなものだったので、森田さんもちょっとびっくりして、「これ以上、詰めても駄目だから、カナダに着いた時に、もう一回、東京とよく連絡を取って、それで考えよう」ということにしました。私は、国内政治のことも気にしておられたと思うし、同時に今から考えますとね、メキシコ訪問は気分的にも不愉快だったろうし、体力的にも消耗されておったんじゃないかなあと思います。人間、誰でもそうなりますよね、また地の涯まで行くわけですから。——カナダはオタワに行ったのですか。

佐藤 オタワに行きましてね、予定されていた議会における演説ですとか首脳会談ですとか公務は

弱者に対する姿勢

淡々と処理されました。カナダの議会で日本の総理が演説したのはこれが最初でしたし、この演説は英語でなされ、ちよっぴりフランス語も交えたのですが、かなり好評でした。それからヴァンクーパーにも行きました。

——今度は西の端にきたわけですよ、日本に近い方へ。

佐藤　そうです。ヴァンクーパーでも、若干、公式行事がありましたから、それをキャンセルするわけにはいかないということでした。話が少し前後しますが、オタワで伊東官房長官に電話したわけです。「総理はこういうことだから、誰か他の人を考えられたらいいかも知れませんか」と。伊東長官は「いや、そんなことじゃない筈だ。自分も総理とキチンと話をして、外遊中にチトー大統領が亡くなって日程の都合がつかぬなら行ってもらおうということだったから、君、行ってもらえよ」と簡単におっしゃるのですよ。私も、間に入ってちよつと困ったんですけど、森田さんの知恵もあり、一計を案じて、伊東長官に総理と直接、話をしていたんです、カナダの大使公邸で。そうしたら総理は伊東長官に説得されたのかなあ、電話を終わったら「行くよ」ということになりましたね、われわれはホツとしたんですけども。若干、心配にはなりましたね。

当時、なぜチトーの葬式に行くのだということでは、議論は実は分かれていたんですね。森田さんも私もソ連のアフガニスタン侵攻もあるし、これから対ソ外交をやっていく上でも、チトーのお葬式に出向いて行くことによって、日本も一つの役割を持っているということをキチンと内外に示すことができるんじゃないか、というようなことでしたね。しかし、おそらく総理の頭には国内政局のことがあったと思います。そこから本当に長い旅でした。

実

——今度はヴァンクーヴァーから……。

就 佐藤 一っ飛びにボンまで行くわけですよ、北廻りの飛行機で、ずうっと行くような感じでね。ボンで給油をしてベオグラードに入るわけです。これは夜行列車に乗っているようなものですよ。これも疲れるんですよ、一〇時間ちよつとかかつたと思いますよね。ボンへ入るのにいったん、ロンドンとかパリに立寄ってからボンに赴くというのが普通なのですが、それを一気に飛んだわけですから、

たいへんだつたと思いますね。ベオグラードには中江要介大使がおられて、空港から大統領官邸に直行して甲意の表明をするという日程でした。その後、大使公邸でちよつと休憩しただけで、葬儀に参列するという強行軍でした。

——しかも、お葬式が何かえらい暑くて、たいへんな状況だつたようですね。

チトー大統領の葬儀出席で疲労の極に

佐藤 暑い日でね、天井のないところで……。ソ連のブレジネフ書記長がきていたし、中国の華国鋒首相やアラファトPLO代表もきていましたね。アメリカはモンデル副大統領でした。そういう人たちが皆、一緒ですから、日本だけ特別にしろ、というわけにはどうしてもいなくてね。私もできるだけ総理の側にいたんですが、秘書官と総理がまったく離れちゃってね。葬式が済んでフーツと皆が出てくるわけですが、車が遠くのほうにいるんで、いくら呼んでもきやしない。これには私、参りましたね。もう高尚な政治論どころじゃない……。ところが、このあと華国鋒首相との二国間会談

をやられたり、ユーゴの新大統領との会談が行なわれたりという日程も入り、たいへんでした。

——物理的に、またそこで大平さんは非常に疲れたわけですね。

佐藤 そうです。それから、帰りにまたボンへ行つて、そこで給油がありますから一晩、泊まるわけです。どうしても休養しなければいかん、と言つてね。そこで、シュミット西独首相と三時間、会談されたのです。これは、私なりに理解するには、対ソ政策の調整を考えておられたと思うのですよ。アフガン侵攻があつて、ソ連がこれからますます対外膨張的になる。そういうことを一番よく知っているのはドイツですから、シュミット首相との会談の主題は対ソ政策についてだったと記憶しています。泊まった日の翌日でしたけどね。私は人数の関係で大平・シュミット会談には入れなかつたんですけど、総理に「どうでした」と伺いましたら、「いやー、対ソ政策についての整理が非常に良くできていますから、参考になつた」と言われましたね。ですから、シュミットと話をしたことが、多分、次のベネチア・サミットの参考になるんだろうと思つておられたに違いないですね。石油の議論はベネチアでも続くわけですから、多分、今度の議論の中心はソ連だと思つておられたんじゃないでしょうか。

——大平さんは何か非常に疲れておられたんですが、ゴルフをされたらいいですね。それは逆に疲れているから、ゴルフをされたんですか。

佐藤 そうでしょうね。やっぱりフラストレーションがたまつておられたから、それを解消するために……。ゴルフには喜んで行かれましたからね。ユーゴからボンに戻られた、その日の午後と、それから翌日。お昼頃に飛行機が出るわけですけど、朝早く起きられて、二日間された。

——それで帰国されてから、たいへんな騒ぎになるわけですが、その騒ぎの最中ですけども、華国鋒首相が来日するわけですね。それで大平・華国鋒会談があるわけですが、これは大きな問題はなかったのですね。

佐藤 前年の大平訪中の答礼ということで、厄介な問題はありませんでした。むしろ、実務協定もつくり上げたし、経済協力も動き始めたということ、次に何をするのかということ……。私の記憶ではたしか日中定期閣僚会議　それぞれの閣僚が一堂に会しての会議　を決めたんじゃないかな。その後、何回かやっていますけども、今はもう続いてません。これからの日中関係を考えて時の緊密な政策討議の場を作られたというのが、華国鋒との会談の内容でしたね。

——それで、いよいよ八　年の内閣不信任案可決、衆参同日選挙になるわけですね。佐藤さんは長い最後の旅を一緒に緒されて、当時、大平総理は七〇歳ですよ、相当、疲れておられたのはよく分りましたか。それとも　。

「相当、疲れておるのだなあ」という印象

佐藤 日頃から、政治家はタフだなと感じていましたし、こっちは必死でお仕えをしていたので、頭では疲れておられるかなとは思っていましたが、倒れられるなどとは思っていませんでした。初日の選挙出陣演説は新宿であったのですが、私もお伴していました。終わって党本部へ帰るまで車の中で足を伸されて疲れをとっておられたのがちょっと気になりましたが、党本部では四階の総裁室まで普通でした。

弱者に対する姿勢

——その時、佐藤さんは当番ですか。

佐藤 当番は於久昭臣秘書官でしたが、私は内政に弱いから強くなりたいと思い、できるだけ国内遊説にも随いて行くことにしていたんです。その日は第一声だということで私も聞いていたんですが、「いやーすこく声を張り上げているなあ」と思いながらね。終わって大平総理が車に乗られたら、本当にグダァッとされておられるから、「いやー、どうされたのかなあ。これはやっぱり相当、疲れておるのだなあ」という印象だけは残っていますね。当時、私らは人が倒れるということを経験している年齢じゃまだありませんからね。それで自民党本部の総裁室へ帰ってこられても、ソファーにグッタリと横になっておられて、「足がだるいんだ」とおっしゃるので、木村（貢）さん（秘書官）とか皆なで、総理の肩を揉んだり足を揉んだりしていました。

——それで午後の部は、横浜へ行くわけですが、それには於久さんと福川（伸次）さん（秘書官）が随いて行くわけですね。佐藤さんは官邸へ……。

佐藤 私は留守番役で総理官邸にいたんですよ。それで時々、於久さんから電話が掛かってきてね。当時は今みたいに携帯電話がないですから、於久さんは総理が演説されている間に、どこかの電話ボックスから掛けてきました。「どうですか」と聞くと、「いやー、どうも総理の調子が悪いんですよ」と言うんです。迂闊にもハートアタック（心筋梗塞）されてるなんてことを誰も思わないものね。森田さんは、ご存知のように四国に戻っておられたわけですよ。小国宏さん（秘書）も勿論、四国です。われわれは落ち着かない気分でしたけれども、これは相当な疲れだなというくらいにしか思っていなかったのです。それでも、お医者を手配したほうがいいということになり、それは福川さんが直接、

実 やつていたのかな。とにかく総理が瀬田のお宅に入る時に一緒になるとまずいので、お医者さんはそれ以前に入ってもらうことにしました。それで診てもらったら、「これは大変だ」というわけでした。まあ、たゞく医学の知識のないのが悔まれました。

去 — その晩、緊急入院と決まるわけですが、その時は佐藤さんは瀬田におられたのですか。

佐藤 はい、瀬田におりました。

— そうすると秘書官は全員、集まられたんですか。

佐藤 秘書官は全員いました。それで番記者にそれが分かっちゃいけないということで、われわれは帰宅するふりをしたわけです。新聞記者の番小屋へ行つて、「これで帰りますから」と言つて、電気を消して帰つたわけです。それで、ぐるーと廻つて、また戻ってきたわけです。それからピーポ、ピーポと救急車が鳴らしてくると困るから、「鳴らさないできて下さい」と言つてね。それで、あの時は、救急車は鳴らさないで来たんです。それから虎の門病院まで行くまでの時間が長いこと。「誰か秘書官、一緒に乗ってくれ」と言うもんだから、私が救急車の助手席に乗つたんです。

— 森田さんじゃないですか。

佐藤 森田さんは、もちろん、乗りましたよ。

いよいよ病院の生活が始まるわけですね。秘書官の皆さんは当番を決めて、交替交替で病院に詰めておられたわけだけれども、佐藤さんは何回ぐらい当番をされましたか。

佐藤 官邸勤務と同じように、病院の秘書官詰所に詰めたのは月曜日と水曜日でした。

— 入院中の総理の様子は、どんな具合でしたか。

佐藤 私は直接、お目にかかることはしませんでした。もう森田さんが詰めていますし、それからご家族の皆さんがやっておられましたから。秘書官のなかでは、福川さんでしょうね、直接いろいろなことをやられていたのは……。

——それで、入院した直後ですか、間近に迫ったベネチア・サミットを控えて佐藤さんにあらかじめベネチアに行ってもらって、歩行の障害になるものがあるかないか、階段は何段くらいだろうとか、あるいは何処から何処までに何メートルあるかを調べてほしい、というような話が出てくるわけですね。これはどういうことですか。

ベネチア・サミットの会場の下調べに

佐藤 たしか六月七日の夜だったと思います。当番秘書官で、一階の病院の秘書官の詰所にいたら「総理が佐藤秘書官を呼んでいますよ」という話があったので、「何だろうな」と思って伺いましたら、「サミットへ自分が行けない時は、どうしたらいいんだ」というお尋ねなんです。私も咄嗟に聞かれたのでびつくりしましたが、「よくご静養になって行けるようにしましょう。まだ日がありますから、代理なんてことは、お考えになる必要はないんじゃないですか」というお答えをし、「行けるために何をしたらよいかという準備をしたいと思います」というようなお話をし、退席した記憶がありますね。

——たしかに、あの当時は、大平さんがサミットに出席できるかどうかは、大問題でしたね。

佐藤 総理の病状の分からない外務省としては対応に苦慮していたわけです。総理に行っていた

実 ければよいと考えても、そこは事務当局からはなかなか言い出せない、ということがありました。五月三〇日に倒れられた時は、様子を見るということでしたが、番記者の代表が総理に二分ぐらいインタビューした六月八日頃から、総理が出席される場合の準備に入る話が出てきましたね。それで私が事前に調べをするということになって、まさに一二日の朝出発の予定をたて、一日の夜は外務省に詰め切りになって打ち合わせをし、もう午前の二時か三時だったと思いますね、私が外務省を出たのは。そして自宅に戻ってちよっと仮眠をとっていたら、「すぐ病院へきて下さい」という連絡が病院からありましてね。結局、出発の飛行機も皆キャンセルしたんです。

——そして、大平総理が亡くなられて、佐藤さんが総理の遺影を持ってベネチアへ行かれたわけですよ。

佐藤 その後、伊東総理臨時代理から「君、(大平総理の)写真を持ってベネチアへ行つてこい」ということでしたから、ベネチアへ行きました。私はベネチアへは若い頃に行ったことがあるけれども、行つてみて、「いやあ、これは総理がこられたら大変だったろうな」と思いました。つまり、飛行機が着いて、ホテルまでは小さい船に乗るのですが、それが結構、揺れるのです。会場になる沖合の島へハシケで行くのですが、その乗り降りがたいへんでした。多分、現場へ行つて事前に調べていたら、ヘリコプターでやつてくれなければ無理だという結論になったでしょうな。また、ホテルに着いたら古いホテルだから階段はあるわけで、車椅子だけだったら無理だなというのが、現地に行つてみての感想でした。それで、イタリアの儀典係が東京の大使館にいた人で、非常に親切でね。「いま会議場が空いているから、総理の写真を持ってきて、撮影するように」と言つて、総理官邸の久保田

公式カメラマンに撮らせてくれたのです。『大平正芳回想録』の資料編にある写真が、そのときの写真ですが、総理のお座りになっていたのであろう場所に私が座って、写真を後から支えて撮りました。

——貴重な写真ですね。いつ、撮ったのですか。

佐藤 昼休みの時間です。それとも一枚、香川県観音寺市の大平記念館に飾ってあるけれども、大平総理の遺影に各国首脳の皆さんに署名をもらったものです。忘れたい写真ですよ。

——亡くなってからも、ずうつとお付き合いがある……。

佐藤 自分の親父でも、あんなこと、死んでまで直面したことがないので、私にとっては本当に大平総理は親父みたいな存在ですね。

——佐藤さんの場合はいまお話があったように、大平さんが総理に就任されてから亡くなるまで、いや亡くなった後も、写真を持ってサミットの会場に行かれる。それから、如水会の先輩と後輩というようにいるんなら因縁があつて、特別に思い入れが深いと思うんですけどね。大平正芳という人と接してみて、どんな感じでしたか。

キリスト教の真髓が自然に口に出てくる人

佐藤 いろんな局面がありますが、一番印象に残っているのは、七九年の夏、軽井沢へお供した時のことです。福川さんが国会の所信表明か何かを官邸で一生懸命に書いているわけですね。私は一番、暇だから行きましよう、と、軽井沢にお供していた時、大平総理は「ひと夏、一橋の学生の頃、あそこにある教会で、アルバイトをしていたんだ」と言われた。『聖書』なんか私よりよく読んでおられる

実
わけですよ。それで、次から次へと『聖書』の言葉が出てくる。「キリスト教の真髄というものが、
就 自然に口に出てくる人なんだなあ」と思いました。そういう総理のプライベートな面だけど、非常に
華 強烈に憶えていますね。

去 — そのアルバイトとは何でしょうか。

佐藤 教会でおそらく説教師の手伝いをされていたんじゃないですか。とにかく『聖書』の言葉を
「お前、知っているか」とばかり、次から次へと口にされるのですから……。

— それは、佐藤さんがクリスチャンであるということを知っていたからでしょう。

佐藤 そうでしょうね。私がカソリックであることは、大平総理はご存知でしたね。ですから、総
理の人間像には打たれるものがありますね。

— 側で見ておられて、「やっぱり、この人はクリスチャンなんだなあ」と感じたフシは、その他
にありますか。

佐藤 何というのかなあ。総理の綴られる文章には宗教人らしい文句があるでしょう。それを私
は感じますね。ですからキリスト教でも遠藤周作（作家）的なものを感じるんですよ。キリスト教と
いうものは欧米の宗教であっても日本には何故それが根付いているのか、そこから出発すべし、日本
には日本の心もある、そういうものとうまく融合しなけりゃならん、というのが遠藤周作のキリスト
教論ですね。大平総理の場合にも、私はそれに非常に近いものを感じますね。大蔵省の役人の時に
やりになられたと聞いている「国民酒場」みたいな思想の中にも、私はやっぱり弱者に対する政治
の姿勢というものを感じるんですよ。

弱者に対する姿勢

——そういうふうなものもあるでしょうけれど、キリスト教の精神というものが分かっているから例えば外国の人と話しても、平仄が合うというか何となく通ずるところがあると……。

佐藤 ありますね。総理を訪ねる多くの外国人が、会談の冒頭で皆な感激するんです。位の高い人もそうでない人も、誰がきても総理室に迎える時に大平総理は「あなたが、わざわざお訪ねいただいたのを私は感謝します」という言葉が、割りに自然に出てくるんですね。これは、もう一国の総理大臣から、そんな言葉が出るとは誰も思ってもいない。総理のそんな台詞の前に会う人のほうが「お忙しいところを……」と言って始まるのが普通なんだけれども……。それで、びっくりしちゃうわけですね。これは、私も外務省において外務大臣にはおおぜいお仕えしたけれども、そういう温か味というか、この人と本当に話をしようという気持ち、最初から出ている懇談の切り出し方をやる人は、大平総理以外に、いぞお目にかかったことがないですね。キリスト教とどういふふうに関係が、このところは分かんないけれども、何かあるような感じがします。

(平成二二年一月二八日 大平正芳記念財団事務所取材)

佐藤嘉恭(さとう・よしやす) 一九三四年生まれ。五八年一橋大学法学部卒、同年外務省に入省。七四年在米大使館参事官、七五年在香港総領事館首席領事、七七年アジア局北東アジア課長、七八年大平正芳内閣総理大臣秘書官、八一年経済局参事官・審議官、八四年在米大使館公使、八八年経済局長、八九年官房長、九二年在OECD日本政府代表部大使、九五年駐中華人民共和国大使をへて、九年退官。同年東京電力顧問、九九年三井海上火災保険顧問、現在にいたる。